

# コレクション展 ガラス×えがく

Collection Exhibition: Glass × *Egaku*

2025.6.7(土)–11.30(日)

富山市ガラス美術館 4 階 展示室 4・透ける収蔵庫

Toyama Glass Art Museum 4 F Exhibition Room 4 & Transparent Storage

主催: 富山市ガラス美術館

Organizer: Toyama Glass Art Museum

## 出品作品リスト List of works

No.	作家名 Artist Name	作品名 Title	制作年 Production Year	サイズ Dimensions (H × W × D cm)	素材・技法 Materials and techniques	備考 Notes
<b>1 ガラスにえがく Drawing / Painting on Glass</b>						
1	ヴァーツラフ・マハチ Václav MACHÁČ	競走馬の頭部 Head of A Racing Horse	2001	64.0 × 22.0 × 22.0	型吹き、ペインティング mold-blown, painted	
2	ジニー・ラフナー Ginny RUFFNER	竜巻となるために Learning to be a Tornado	2012	43.2 × 45.7 × 48.3	フレームワーク、エナメル、ペインティング framework, enamel painted	
3	ウラジミール・コペツキー Vladimír KOPECKÝ	ストレンジ・テーブル Strange Table	1985-1987	49.8 × 50.0 × 42.0	ペイントした吹きガラス、ペイントした板ガラス、金属フレーム painted blown glass, painted sheet glass, metal frame	
4	ボフミール・エリアッシュ Bohumil ELIÁŠ	青い輪の中に In Blue Ring	2003	50.0 × 50.0 × 10.0	積層ガラス、エナメル彩色 laminated glass, enamel painted	
5	エルヴィン・アイシュ Erwin EISCH	そして私の仮面は落ちた（頭像「ピカソ」シリーズ より） Silvery Picasso Meanwhile My Mask Has Dropped, from the portrait head series "Picasso"	1997	H48.0 × Ø 36.0	型吹き、宙吹き、エナメル着彩 mold-blown and free-formed glass, mirrored, enamel painted	
<b>2 ガラスでえがく Drawing / Painting with Glass</b>						
6	大平 洋一 OHIRA Yoichi	ラグーナ（潟） Laguna	1999	20 × 20 × 20 15 × 22 × 22	宙吹き、ケーン、研磨 hand-blown glass canes, polished	中田真理子氏寄贈 Donated by NAKATA Mariko
7	トゥーツ・ジンスキー Toots ZYNSKY	底知れぬカオス BOTTOMLESS CHAOS	制作年不明 Date unknown	30.0 × 54.0 × 34.0	フィレ・ド・ヴェール filet de verre	
8	藤田 潤 FUJITA Jun	風の道 The road of wind	1996	54.5 × 100.0 × 45.0	宙吹き、酸腐食 blown, acid etched	作家寄贈 Donated by the artist
9	石井 康治 ISHII Koji	風 Wind	1988	34.5 × 35.0 × 19.5	宙吹き blown	
10	渡辺 知恵美 WATANABE Chiemi	呼び声 A call	2010	各/each: 99.0 × 41.0 × 30.0	パート・ド・ヴェール pâte de verre	
11	小柴 外一 KOSHIBA Sotoichi	あざみ花盛 Vase with Thistle Design	1937年頃 (c.1937)	18.0 × 14.2 × 14.2	パート・ド・ヴェール pâte de verre	
12	作田 美智子 SAKUTA Michiko	光の満ち引き The ebb and flow of the light	2023	33.0 × 80.0 × 55.0	キルンキャスト、鏡面仕上げ、研磨、サンドブラスト kiln cast, mirrored, polished, sandblasted	
13	コリン・リード Colin REID	無題 #R1384 UNTITLED #R1384	2007	32.0 × 54.0 × 14.0	キルンキャスト、ロスト・ワックス、光学ガラス、研磨 kiln cast, lost wax casting, optical glass, ground and polished	
<b>3 ガラスを彫りえがく Painting on glass through Carving</b>						
14	後藤 洋平 GOTO Yohei	白い世界 The world in the snow	2007	50.0 × 300.0 × 3.0	サンドブラスト、スクラッチ sandblasted, scratched	
15	各務 鑑三 KAGAMI Kozo	宝相華硝子花瓶 Vase with Hosoge Design	制作年不明 Date unknown	35.2 × 19.8 × 19.8	グラヴィール engraved glass	
16	各務 鑑三 KAGAMI Kozo	人物模様硝子花瓶 Vase with Figure Design	制作年不明 Date unknown	30.0 × 20.0 × 10.0	グラヴィール engraved glass	
17	エルヴィン・アイシュ Erwin EISCH	キャノン「月の衝撃」 Cannon "Moon-Struck"	1991	H56.0 × Ø 14.0	宙吹き、エングレーヴィング、ラスター着彩 blown, engraved, luster painted	
18	エルヴィン・アイシュ Erwin EISCH	キャノン「月の衝撃」 Cannon "Moon-Struck"	1991	H46.0 × Ø 13.0	宙吹き、エングレーヴィング、ラスター着彩 blown, engraved, luster painted	
19	ヤロスラフ・シャーラ Jaroslav ŠÁRA	緑のライオン LEO VIRIDIS	2021	90.0 × 90.0 × 10.0	エングレーヴィング engraved	
20	イジー・ハルツバ Jiří HARCUBA	老子 Lao's	2004	21.0 × 15.0 × 6.0	エングレーヴィング engraved	
21	イジー・ハルツバ Jiří HARCUBA	アントニーン・ドヴォルザーク Antonín Dvořák	2004	15.0 × 15.0 × 2.0	エングレーヴィング engraved	
22	中村 敏康 NAKAMURA Toshiyasu	樹（春） Tree(spring)	2015	H27.0 × Ø 25.0	カット、吹きガラス cut, blown glass	

【作品解説】コレクション展 ガラス×えがく  
主催:富山市ガラス美術館 会期:2025.6.7(土)- 11.30(日)

## 第1章 ガラスにえがく

1

《競走馬の頭部》 2001年

型吹き、ペインティング

ヴァーツラフ・マハチ／Václav MACHAČ

1945年チェコ共和国(旧チェコスロバキア共和国)カメンツキー・ナドウ・パウ生まれ、現在ノヴィーボル在住。

本作は競走馬をモチーフに塑像、型取り、ガラスの型吹きの技法で制作されている。馬の骨格、しなやかな肉付き、戦いの場で滲み出る闘志や憂いを含む表情は、ガラスの可塑性を活かして再現され、着彩は豊かな毛並みや血色を表わす。競走馬としての風格や威厳、哀愁が感じられる。

2

《竜巻となるために》 2012年

フレームワーク、エナメル、ペインティング

ジニー・ラフナー／Ginny RUFFNER

1952年アトランタ(米国ジョージア州)生まれ、2025年逝去。

本作はガラス棒を卓上のガスバーナーで溶かすフレームワーク技法で制作された。様々な形状のガラスパーツを制作した後、ガラス表面にサンドブラストを施し、絵の具や色鉛筆で絵付けをした後、それらを組み立てていく。彫刻と絵画が組み合わされたような表現が特徴的な一作である。

3

《ストレンジ・テーブル》 1985-1987年

ペイントした吹きガラス、ペイントした板ガラス、金属フレーム

ウラジミール・コペツキー／Vladimír KOPECKÝ

1931年スヴォヤノフ(旧チェコスロバキア共和国)生まれ、現在チェコ共和国在住。

コペツキーにとってガラスはえがくための手段という。一見モチーフを汚すかのような荒々しい塗料に目がいくが、塗料によって金属とガラスは繋がり、一体感が現れている。また余白のガラスの透明感が際立つことで、全体的に静と動のバランスのとれた表現となっている。

【作品解説】コレクション展 ガラス×えがく  
主催:富山市ガラス美術館 会期:2025.6.7(土)- 11.30(日)

4

《青い輪の中に》 2003年

積層ガラス、エナメル彩色

ボフミール・エリアッシュ/Bohumil ELIÁŠ

1937年ナソブルキ(旧チェコスロバキア共和国)生まれ、2005年逝去。

エリアッシュは自身を画家であると語る。部分的にペイントを施した丸く透明な板ガラスを積層し、作品内部の空間に1つの景色を作り上げた。えがかれた図柄は層を重ねて、混色したような深い色味と複雑な形体で表されている。ガラスの透過性を活かした絵画表現と言えよう。

5

《そして私の仮面は落ちた(頭像「ピカソ」シリーズより)》 1997年

型吹き、宙吹き、エナメル着彩

エルヴィン・アイシュ/Erwin EISCH

1927年フラウエナウ(ドイツ バイエルン州)生まれ、2022年逝去。

輝く銀色の塗料が目を惹く本作は「パブロ・ピカソ」の姿を用いて、アイシュの関心事を表したピカソ礼賛シリーズの内の1作である。アイシュにとってガラスは絵をえがくための素材であり、光の透過など固定化されたガラスのイメージに捉われない自由な表現を目指している。

【作品解説】コレクション展 ガラス×えがく  
主催:富山市ガラス美術館 会期:2025.6.7(土)- 11.30(日)

## 第2章 ガラスでえがく

6

《ラグーナ(潟)》 1999年

宙吹き、ケーン、研磨

大平 洋一／OHIRA Yoichi

1946年東京都生まれ、2022年逝去。

ガラスの不透明性と透明性のバランスが美しい本作は、渡欧した大平がヴェネツィアの海をテーマに制作したシリーズである。器の表面をライン状の透明ガラス、不透明ガラスが覆うように走り、アドリア海の煌めく水面と砂や苔などの自然物が複雑に合わさり一体となって揺れ動く様をえがいている。

7

《底知れぬカオス》 制作年不明

フィレ・ド・ヴェール

トゥーツ・ジンスキー／Toots ZYNSKY

1951年ボストン(米国マサチューセッツ州)生まれ、現在プロヴィデンス(米国ロードアイランド州)在住。

本作は糸のように細いガラスを用いたフィレ・ド・ヴェール※というジンスキー独自の技法で制作された。花が開くようなのびやかな形と明るい色彩がリズミカルに配された様は、器型の絵画のようであり、音楽やダンス、旅が好きと語るジンスキーの好奇心や探究心を映し出している。

※フィレ・ド・ヴェールとは糸状に細く引き延ばし、カットしたガラスを丸い型の上に並べ、窯に入れる技法である。ガラス同士を融着させ、円盤型のガラスを作る。次に型と一緒に焼成し、ガラスの自重を利用して器の形を作る。さらにガラスを手で押したり、引っ張ったり、ねじったりすることを繰り返し、思いえがく造形に近づけていく。ジンスキーはこの技法で制作するにあたり、改めて色彩について研究を深めていったという。

【作品解説】コレクション展 ガラス×えがく  
主催:富山市ガラス美術館 会期:2025.6.7(土)- 11.30(日)

8

《風の道》 1996年

宙吹き、酸腐食

藤田 潤／FUJITA Jun

1951年東京都生まれ、現在千葉県在住。

本作は、藤田が1993年以降手掛ける「風の道」シリーズの内の1作である。植物や花を思わせる3つのオブジェは、風になびいて穏やかに揺れているかのようである。移ろいゆくものの一瞬の姿を捉え、ガラスのもつ浮遊感と柔らかな色彩と共にえがき出した藤田の代表作と呼べる作品である。

9

《風》 1988年

宙吹き

石井 康治／ISHII Koji

1946年千葉県生まれ、1996年逝去。

石井は制作時に何度も繰り返しデッサンを行う。対象の色や形、温度、空気感を感じとり、イメージを膨らませてから、色ガラスや金箔<sup>ばく</sup>を用いた吹きガラス制作に入る。石井の鋭い観察力と豊かな感受性を通してえがかれた木々の景色は、幻想的で暖かな光に満ちている。

10

《呼び声》 2010年

パート・ド・ヴェール

渡辺 知恵美／WATANABE Chiemi

1989年富山県生まれ、現在山口県在住。

本作は、広がる世界に人知れず生きる美しい草花たちの願いを表すという。パート・ド・ヴェールならではの淡い色彩で纖細にえがかれた植物は、神秘的な雰囲気を纏<sup>まと</sup>っている。また半立体的な植物の表現は、「平面と立体の中間の追求」をテーマとした現在の渡辺の制作と連続性が感じられる。

【作品解説】コレクション展 ガラス×えがく  
主催:富山市ガラス美術館 会期:2025.6.7(土)- 11.30(日)

11

《あざみ花盛》 1937年頃

パート・ド・ヴェール

小柴 外一／KOSHIBA Sotoichi

1901年富山県生まれ、1973年逝去。

本作は粉状のガラスを糊などで練り、型へ入れ焼成するパート・ド・ヴェール技法で制作された。色ガラスの柔らかな発色と繊細な造形で、あざみの凛々しくも愛らしい佇まいを丁寧にえがいている。またガラスは細かい気泡を含み、砂糖菓子のような軽やかな風合いが魅力的である。

12

《光の満ち引き》 2023年

キルンキャスト、鏡面仕上げ、研磨、サンドblast

作田美智子／SAKUTA Michiko

1982年神奈川県生まれ、現在東京都にて制作を行う。

本作は寄せては返し、うねる波の様相をえがきだしている。型で焼成したガラスを、研磨して作られた鏡面から透過する光と、サンドblastで作られた磨りガラスからもたらされる影が、ガラスの内部で共存する。奥行や浮遊感のある不思議な空間が目をひく作品である。

13

《無題 #R1384》 2007年

キルンキャスト、ロスト・ワックス、光学ガラス、研磨

コリン・リード／Colin REID

1953年ポイントン(英国チェシャー州)生まれ、現在ストラウド(英国グロスター・シャー州)在住。

本作はガラスをのぞき込むと、バイオリンやチェロの一部が浮かびあがり、まるで澄んだ音色が聞こえるようである。これは、ガラス底面の型跡と着色、透明度の高いガラスの光の透過、屈折、反射の効果で表されている。また作品との距離や角度によって見え方は変化し、眺めるたびに新鮮な景色が広がる。

【作品解説】コレクション展 ガラス×えがく  
主催:富山市ガラス美術館 会期:2025.6.7(土)- 11.30(日)

### 第3章 ガラスを彫りえがく

14

#### 《白い世界》 2007年

サンドブラスト、スクラッチ

後藤 洋平／GOTO Yohei

1983年秋田県生まれ、現在千葉県在住。

本作は後藤の故郷、雪国の記憶がテーマである。板ガラスにサンドブラスト※やリューターを用いて削るように模様をえがき、光をあてると彫りの線とガラスの背後の印画紙に落ちた影が合わさった景色が生まれる。また連作とすることで、時の流れ、秘められた物語性を引き立たせている。

※サンドブラストとは、高速のエアーで砂をガラスに吹き付け、すりガラス状に表面を加工したり、浮き彫りなどの彫刻を施す技術。

15

#### 《宝相華硝子花瓶》 制作年不詳

グラヴィール

各務 鎌三／KAGAMI Kozo

1896年岐阜県生まれ、1985年逝去。

器の表面から、あふれんばかりの大きな花と、まるで踊るかのように軽やかな調子で葉や茎が彫りえがかれている。その一方で、花弁や葉脈などは纖細に彫られ、ガラスの一部には研磨が施されたことによって光沢が生じ、様々な表現が凝縮された1作に仕上がっていいる。

16

#### 《人物模様硝子花瓶》 制作年不詳

グラヴィール

各務 鎌三／KAGAMI Kozo

1896年岐阜県生まれ、1985年逝去。

本作は透明なガラスの素地に色ガラスを被せた後、表層のガラスをグラヴィールで彫り込む手法で制作されている。深い青色の空間のなか、人物が佇む姿が印象的である。絶妙な彫りの深さや角度で刻まれた人物は半立体的に柔らかく浮かび上がり、静謐な空気が流れている。

【作品解説】コレクション展 ガラス×えがく  
主催:富山市ガラス美術館 会期:2025.6.7(土)- 11.30(日)

17、18

《キャノン「月の衝撃」》 1991年

宙吹き、エングレーヴィング、ラスター着彩

エルヴィン・アイシュ／Erwin EISCH

1927年フラウエナウ(ドイツ バイエルン州)生まれ、2022年逝去。

本作は、アイシュが手がけたガラスのうちキャノンシリーズと呼ばれる作品群である。背景の幻想的なグラデーション、モチーフの煌びやかな金色、エングレーヴィングによる纖細な描線が調和し、不気味さとユーモアを兼ね備えたアイシュ独特の世界が立ち現れている。

19

《緑のライオン》 2021年

エングレーヴィング

ヤロスラフ・シャーラ／Jaroslav ŠÁRA

1981年ヴァルンスドルフ(旧チェコスロバキア共和国)生まれ。

本作で表される場面は、酸(獅子)で金(太陽)を溶かし賢者の石を作る鍊金術の過程の寓意であり、太陽を食べる獅子は終末、喜劇、復活、希望の象徴である。彫りえがかれた5枚のガラスを重ねることで、モチーフは立体的に立ち上がり、背景は吸い込まれるような奥行を生んでいる。

20、21

《老子》、《アントニーン・ドヴォルザーク》 2004年

エングレーヴィング

イジー・ハルツバ／Jiří HARCUBA

1928年ハルラホフ生まれ(旧チェコスロバキア共和国)生まれ、2013年逝去。

ハルツバは、ガラス板に敬愛する人の横顔を彫り出す肖像画シリーズの作品を数多く手がけた。その対象は友人、芸術家、歴史上の著名人など様々である。描線は、力強く、シンプルで無駄がない。また広い余白は、鑑賞者にえがかれた人物のイメージを膨らませる余地を残すかのようである。

【作品解説】コレクション展 ガラス×えがく  
主催:富山市ガラス美術館 会期:2025.6.7(土)- 11.30(日)

22

《樹(春)》 2015年

カット、吹きガラス

中村敏康／NAKAMURA Toshiyasu

1975年福岡県生まれ、現在同地在住。

本作は、重ねたガラスの上層を削り下層を出すカット技法により制作されている。中村は木彫りを学んだ経験を生かし、器の表面に彫刻刀で彫るような大らかな描線を刻む。その一方で、底の花模様は直線的でシャープに彫りえががれており、カット技法の様々なえがき方を楽しめる1作である。